

産婦人科医療における漢方薬の役割とこれから

独立行政法人 地域医療機能推進機構 埼玉メディカルセンター
副院長兼産婦人科部長 伊藤 仁彦 先生

1981年 慶應義塾大学 医学部 卒業
同 年 慶應義塾大学病院 産婦人科 研修医
1988年 社会保険埼玉中央病院(現 JCHO埼玉メディカルセンター)
産婦人科(1989年 同医長、2002年 同部長)
2011年 埼玉社会保険病院(現 JCHO埼玉メディカルセンター)
副院長兼産婦人科部長
2014年 JCHO埼玉メディカルセンター 副院長兼産婦人科部長



JR京浜東北線の北浦和駅からほど近い地に位置するJCHO埼玉メディカルセンターは、長年にわたり地域医療に貢献し、いまも「埼中」(社会保険埼玉中央病院当時の愛称)と親しまれている。そして2014年4月には、独立行政法人地域医療機能推進機構(Japan Community Health care Organization : JCHO)の病院として再出発した。同院で長年産婦人科医療に携われ、副院長としてもご活躍の伊藤仁彦先生は、漢方治療に対しても熱心に取り組み、患者さんのあらゆるニーズにお応えできるよう努めておられる。そこで、産婦人科医療における漢方治療の役割とこれからについて、伊藤先生にお伺いした。

“地域医療・地域包括ケアの要”を目指す

当院の歴史は、1944年に東京都下谷区(現在の台東区)で開設された「健康保険組合連合会第一病院」に遡ります。1955年には「社会保険埼玉中央病院」と改称して現在の地に移設しました(1999年には「埼玉社会保険病院」に改称)。さらに、社会保険庁の廃止(2009年)に伴い、2014年4月からJCHOの病院として再出発しました。

JCHOの使命は、今後の高齢化社会を見据えた「地域医療・地域包括ケアの要」となることです。当院もJCHOの一員として、従来からの埼玉県浦和地区の基幹病院としての役割に加え、在宅を含めた地域医療と介護にも目を向けるべく、介護老人保健施設や地域包括支援センターも併設し、「地域包括ケアの要」となることを目指しています。

地域の産婦人科医療を支え続ける

当院には、毎日平均1,200人以上と多くの患者さんが来院されており、産婦人科も例外ではありません。当科では、患者さんのニーズのすべてにお応えできるよう、設備・体制の充実に努めています。

当科では特殊外来として、「不妊外来」と「更年期外来」を

開設しています。

事前の予約が難しい不妊症の患者さんをお待たせしないためにも、通常の外来とは別に不妊外来を開設しました。体外受精-胚移植(IVF-ET)もすでに多くの実績がありますし、手技に熟練を要する「卵管鏡下卵管形成術(FT: Falloproscopic Tuboplasty)」も施行しています。不妊の原因には、女性因子として卵管因子・排卵因子がありますが、中でも卵管因子による不妊は大きな割合を占めています。FTは卵管の狭窄・閉塞部位を開放する手技であり、IVF-ETに移行する前に試みられるべき治療法です。

また更年期外来は、患者さんのお話をじっくり聞いて差し上げたいという目的で開設しました。

当科ではその他にも、悪性腫瘍に対する手術、抗がん剤治療および放射線治療や、子宮筋腫・子宮内膜症に対する手術・薬物療法なども当然ながら行っていますし、手術についてはかなり早期から低侵襲で術後の回復も早い内視鏡下手術を導入しており、すでに多数の実績があります。

ただ残念なことに、2009年4月から入院分娩を一時休止しています。分娩数が1,000件/年を超えていたこともありましたが、新生児・未熟児を担当していただく小児科医が不足し、患者さんにご満足いただける医療が提供できないと判断したからです。

当科における漢方診療の実際

当科は、私が赴任した当時の産婦人科部長が漢方治療に非常に熱心に取り組んでおられましたので、その流れを汲んでスタッフ全員が積極的に漢方治療に取り組んでいます。もちろん私自身も、当院に赴任してから積極的に漢方治療に取り組むようになりました。さらにその当時、日本東洋医学会で専門医制度が始まりましたので、私も漢方専門医に認定されるべく漢方治療にのめり込むようになりました。

現在、当科で使用している処方数は約30にものぼります。当帰芍薬散、加味逍遙散、桂枝茯苓丸の処方が圧倒的に多いのが現状ですが、いろいろな疾患や病態にも漢方治療を応用しています(表)。

その一つが子宮内膜症に対する桂枝茯苓丸です。有効性はもちろんのこと、長期間使用しても安全性は高いですし、ホルモン動態を妨げることもありません。たとえば、手術後の再発予防において、患者さんが挙児を希望される場合には桂枝茯苓丸のよい適応です。実際に桂枝加茯苓丸を、子宮内膜症の再発予防を目的に長期間服用され、再発なく妊娠が成立した患者さんも多くいらっしゃいます。

近年の社会構造の変化に伴い、女性の晩婚化が進んでいます。それに伴って不妊で悩まれる患者さんも増えていきますし、子宮内膜症も最近では未婚で将来、挙児を希望される患者さんが多数いらっしゃいますので、桂枝茯苓丸を必要とする患者さんもさらに増えるものと思います。

表 埼玉メディカルセンター産婦人科において使用される漢方処方と処方対象

処方名	主な処方対象
当帰芍薬散	更年期障害、など
加味逍遙散	更年期障害、など
桂枝茯苓丸	更年期障害 子宮筋腫 子宮内膜症
補中益気湯	更年期障害、など
加味帰脾湯	更年期障害(虚証、精神症状・不安症状)
桃核承気湯	更年期障害(実証、のぼせ・ほてり)
柴苓湯	不育症
大建中湯	術後の腸閉塞
呉茱萸湯	腰椎麻酔後頭痛
芍薬甘草湯	月経痛、タキサン系薬剤による末梢神経障害
半夏瀉心湯	イリノテカン塩酸塩による下痢
葛根湯	乳腺炎・乳汁うっ滞
小柴胡湯加桔梗石膏	咽頭炎



変化する疾病構造

高齢化が急速に進み、女性の社会進出の増加などの社会構造の変化、そして生活様式の欧米化などの様々な要素によって、産婦人科においても疾病構造は変化し、産婦人科医療に対するニーズも多様化しています。たとえば、高齢化でエストロゲン分泌の低下に伴う外陰部や膣の乾燥感、萎縮性膣炎などでお悩みの患者さんも増えています。ストレスに伴う生理不順も増えていますが、これも社会構造の変化が影響しているのかもしれませんが、また、子宮脱の患者さんが増えていますが、生活様式が和式から洋式へ変化したことが影響している可能性が指摘されています。

このような疾病構造の変化は、今後も続くものと思います。そして、漢方治療を必要とする場面はさらに増えるものと考えています。

さらに高レベルの医療を提供するために

私が当院に勤務するようになって、すでに26年が経過しました。その間に地域の多くの方と長年にわたりお付き合いしておりますので、たとえば赴任当時に思春期だった患者さんが当院で出産される、あるいは当院で出産された患者さんが更年期外来を受診されるなど、個々の患者さんの流れを見ながら、地域医療に少しでも貢献できていることを実感しています。

残念ながら現在、入院分娩は休止していますが、早期に再開できるような体制とすべく調整を進めています。そして地域のみなさんに、さらに幅広く、質の高い医療をご提供したいと願っています。